

立場の違いから恋心は押し殺そうとしていた

のに、愛情わからせで口説き落されました

花室かんろ

注意書き

● この作品は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます

● ハート喘ぎ、濁点喘ぎなどを含みます

● 外部からの圧力による結婚・性行為の描写がありますので、苦手な方はご注意ください。現実でのそのような行為を推奨する意図はまったくございません

立場の違いから恋心は押し殺そうとしていたのに、愛情わからせて口説き落されました

第一章 二宮蒼葉の結婚

にのみやおおば

運動公園の隣で、緑に背面を抱かれるようにして建っている、十四階建てのマンション。夕飯どきのその建物の一室では、一人の少女がくるくると働いていた。

野菜を切って、お肉を焼き始めたら、待つ間に、大学のレポートを少し進めよう。

蒼葉はノートパソコンに学籍番号と、所属学部と、名前を打ち込む。

二宮蒼葉……と打ってからハツとして、バックスペースキーを押す。

一城蒼葉いちじょう。これでいい。自分はもう一城家に嫁いだのだ。

とはいえ二十年間使っていた名字が突然変わったので、まだ慣れない。ジュージューとお肉の焼ける音を聞きながらキーボードを打つ蒼葉だが、意識は半分、自分の結婚生活について思いを馳せていた。

一城家は由緒正しき、資産家の一族だ。今でも複数の事業を経営している。

二宮家も由緒正しき、奉公人の一族だ。先祖代々、一城家に仕えてきた。

そんな主従関係のある両家だが、昔から続くしきたりがある。二宮家

は数代に一度、忠義の証に、一城家に結婚相手を献上するのだ。

今代は蒼葉に白羽の矢が立って、一城家三兄弟の次男、一城千茅ちがやに嫁

ぐことになった。

そろそろいい頃合いかと思い、蒼葉はフライパンを見た。

うん、いい焼き目。

蒼葉は皿に盛り付けながら、結婚についての思考を続ける。

上下関係ありきの結婚だったが、蒼葉は幸せだった。

結婚相手の千茅は、歳は二十六歳、二宮家の蒼葉を娶ったからといって乱暴を働くわけでも、こき使うわけでも、純潔を弄ぶわけでもなく、

元々は千茅が一人暮らしをしていたこのマンションに迎え入れてくれた。

掃除、洗濯、料理などの家事も、折半しようとしてくれる（そのたびに蒼葉は「そんなこと千茅様にさせられません!」と言い張るのだが）。

家事をするだけで衣食住が確保され、大学にも通わせてもらい、自分の部屋まである。

自分には身に余るような幸せな生活だと、蒼葉は常々思っていた。

過去には、一城家に嫁がされた二宮家の者が、おもちゃのように好き勝手され、飽きたら見向きもされなくなる、というような事例もあったという。

一城家でも特に優しい千茅に嫁げてよかった、と蒼葉は思った。

それは今の待遇が良いというのものもあるし、それに……。

とそこまで考えていたところで、鍵が開く音がしたので、蒼葉は玄関に向かう。

「おかえりなさいませ」

一礼して、顔を上げる。

「ああ、帰った」

蒼葉の夫、一城千茅は言葉少なに答えた。

すらりと高い背に、仕立てのいいスーツ。無表情なのはいつものことで、機嫌が悪いわけではない。

蒼葉が鞆を受け取ろうとするのを拒否して、室内へ歩き出す。蒼葉も
ちよこちよこと後ろをついて行く。

「お食事の準備、すぐに完了します」

「そうか。いつもすまない」

千茅はそう言うと、自室へ入っていった。着替えに行ったのだ。

蒼葉はそのうちに皿を食卓に運んだ。

「お前の分は？」

食卓についた千茅の前には、一人分の食事。蒼葉は傍に控えるように
立っているの、千茅の正面は空っぽだった。

「いえ、私は……あとで頂きますので」

蒼葉は首を振って、小さな声で答えた。

主人である一城千茅と、二宮家の出の蒼葉が同じテーブルで食事を摂るなんて、恐れ多くて考えられない。

「食欲がないのか？それか体調でも……」

千茅が眉を下げたので、蒼葉は心配をかけまいと慌ててぶんぶんと首を振った。

「大丈夫です！そうじゃなくて、ご相伴にあずかるなんて、とんでもなく……」

すると千茅は、蒼葉の言葉に気分を害したのか、表情を曇らせた。

「夫婦なら一緒に食事を摂るものだろう。それに前にも言ったが、俺は二宮家の人間を隷属させるのは好かん」

「はい……」

蒼葉はシュンとなって下を向いた。

確かに千茅は結婚してすぐの頃、二宮家の人間が一城家の支配下で、自由が少ない人生を送るのには反対だと言っていた。それに、もし千茅が言葉にしなかったとしても、千茅がそう考えているであろうことは、蒼葉にも察せられていた。

蒼葉がまだ幼い頃から、当時実家の一条本邸で暮らしていた千茅は、掃除や片付けでパタパタ走り回る二宮家の子どもを自室に招き入れて、

こつそりと休ませていたからだ。

そんな風に、幼くても立場が低くても、一人の人間として扱ってくれる千茅だから、蒼葉は好きになったのだ。

そう、蒼葉は一人の少女として、千茅が好きだった。「好き」と素直に認めるのは気恥ずかしいし、立場がそれを許さないなので、その気持ちと蒼葉自身しっかりと向き合ったことがなく、まだ芽吹く前の蕾のように淡い想いだった。それでも確かに蒼葉は、ぶつきらぼうながらに優しい、歳上の、憧れのお兄さんとして千茅を慕っていた。

「別に叱ったつもりじゃないんだが……。嫁いで来たからにはそれなりには幸せにしてやりたくてだな……。もつとこう、あるじ主じゃなくて夫と

して……対等で自由な関係と思ってもらいたくてだな……」

うっむ

俯く蒼葉に戸惑ったのか、千茅はもどかしそうに言葉を続けた。

しばらく考え込むようにしながら、「だから」とか「うん」とか、意味のない言葉を呟いていた千茅だが、やおら顔を上げた。

千茅のその顔には、ハツとしたような、ようやく腑に落ちたような表情が浮かんでいた。

「そうか……。夫とってもらうにはまず、好きになってもらう方が先か……」

千茅の手が伸びて、蒼葉の手首をパシッと掴んだ。

「ひゃ……!？」

千茅に触れられたのは初めてで、混乱と緊張で蒼葉の心臓はうるさい程に拍動した。

その上、千茅の意志の強そうな瞳に目をじつと見つめられて、蒼葉は赤面したり、目を白黒させたりと大忙しだった。

千茅は真っ直ぐ見据えた目を、蒼葉からそらすことなく言った。

「これから、俺の全力を尽くしてお前を口説く。覚悟しろ」

第二章 二宮家の役目

宣言通り、その日から千茅は蒼葉を口説きにかかった。

仕事帰りに花束を買ってきたり、休日に蒼葉を百貨店に連れて行き、化粧品や洋服を薦めたり。

二宮家の人間だった頃は、高価な服や華美な格好は似つかわしくないと言われていたので、蒼葉は自分の見た目に関して「一城家の品位を下げない清潔感」以外のこだわりは持っていなかった。いや、年相応のおしゃれ心はあったものの、家の都合で我慢しているうちに無意識に無個性なものしか選べなくなっていたと言うべきか。

そんな蒼葉が、売り場に並ぶ色とりどりの服や化粧品に戸惑っている

のに気づくと、千茅は販売員に見立てを頼んで一式揃えさせ、それを丸ごと購入していくのだ。

もちろん甘い言葉も忘れない。「似合っている」や「可愛い」と言われるたびに蒼葉の背筋は甘く揺らいだ。

高価な店で、自分のための買い物をして、きれいに着飾って、隣には大量の荷物を持ってくれている王子様がいて。蒼葉は自分が、使用人からいきなりお姫様にでもなった気分だった。

魔法にかかったような錯覚をしそうになるたびに、蒼葉は固く拳を握ってブンブンと頭を振った。

そして自分にこう言い聞かせるのだ。

私は千茅様にお仕えする身。分不相応な想いを抱いてはいけない。結婚という形はとつていても、あくまで自分は使用人。その一線を越えてはいけない。

千茅が手を差し出すたびに、胸の奥が甘く痛む。コロリと転げ落ちるように、千茅への想いを認めてしまいたくなる。千茅もきつとそれを望んでいる。もし蒼葉が千茅に想いを伝えたら、千茅は蒼葉を妻として扱いたい、丸く収まるだろう。

しかし蒼葉は、生まれた時から自分は一城家に仕える身なのだと教え込まれてきたのだ。

千茅の手を取るのには、蒼葉の中に染み付いた教えが許さなかった。

そんな生活の中でふと、千茅は事もなげに言った。

「そういえば、お前にとっての愛には体の関係も必要か？」

「えっ……？」

蒼葉はお茶を淹れる手を止めて、千茅を見た。

千茅の意図は掴みきれないが、おそらく蒼葉と千茅の間の性交渉について言及したいのだろう。

今までの千茅は、性的な関係を匂わせることすらしてこなかったので、突然のことに蒼葉は言葉を失った。

「正直、ここままでしてもお前を口説き落とせないとは思っていなかった。

今まで身体的な接触は避けていたが、そういう面も全部含めて妻として扱えば、お前は俺を夫と認めてくれるようになるか？」

「え、ええと……」

つまりは、今後はセックスも含めた夫婦生活を送るか、ということだ。蒼葉は二宮家の人間の常で、自分の気持ちよりも千茅のことを優先して考え始めた。

結婚して以来、おそらく千茅は他の女性と関係を持っていない。

そもそも女性に興味がないのかもしれないが、蒼葉と結婚したので義理立てをしている可能性は大いにある。

もしも、自分のせいで千茅に我慢を強いているのだとしたら……。男

女の楽しい部分は提供しない自分が、名目だけの婚姻で千茅を縛りつけているのだとしたら……。

千茅の欲を受け止めるのは、自分の義務だと思った。

（千茅様が望むなら、お相手をしなないと）

「はい、その、ええと……はい」

何と言って承諾の意を示したらいいかわからなかった蒼葉は、頷くことで返事をした。

性行為をする意思があることは、千茅にも伝わったらしい。

こうして、一方は忠義のため、他方は口説き落とすための、性生活が始まった。

「んんっ♡んんっ♡♡」

千茅に後ろから突かれながら、蒼葉は必死に声を抑えた。

パンッパンッパンッ♡ぐちゅっ♡

「んっ♡んっ♡んっ♡」

（私は、千茅様を気持ちよくするのが役目なのに♡♡私が気持ちよくな
ってちやダメなのに♡♡）

しかし千茅は容赦なく腰を打ちつけてくる。

蒼葉は枕に顔を埋めて声を我慢した。

以前、それこそ初めて抱かれた時、声は我慢しなくていいと言われて、

試しに出してみたのだが、自分ばかりが気持ちよくしてもらっている感覚が強くて、これでは駄目だと喘ぎ声を抑えるようになった。

「ん……っ♡ふ……♡」

しかししっかりと感じていることは、千茅には完全にバレているらしい。蒼葉の鉄壁を崩そうと激しく責め立てる。

「はぁ……っ。まったく、お前はいつになったら素直になるんだ？」

そうして腰が止まると、蒼葉はくるんと反転させられた。正常位で千茅と向き合う形になる。

荒い息の、野獣のような目をした千茅に組み敷かれ、蒼葉の中の雌が柔媚し始めた。

この雄に犯されたい♡めちやくちやくに犯されて、奥の奥まで暴かれた
い♡

しかし蒼葉は気を強く持ち直す。この行為は千茅を気持ちよくするた
めのものであって、蒼葉の快樂のためのものではないのだ。

「わ……わたしは、千茅様にお仕えする身で、わたしが、きもちよくな
ってちやだめで……♡」

「お前は真面目……いや、それを通り越してもはや剛情だな」

千茅は半分呆れたようにフツと笑った。そんな仕草すら様になってい
て、蒼葉はキュンときめいた。

蒼葉がときめきを感じた次の瞬間には、千茅は動きだした。

「ひゃっ!? あ、んっ!! んう♡んっ♡」

千茅のモノが、ゴリゴリと腔壁を蹂躪する。

トントントンッ♡

最奥がノックされ、そのたびに子宮が飲んでるのがわかる。

(あ……これダメだ……♡)

蒼葉の体が強張って、震えだした。

「あ……っ♡あんっ♡あんっ♡」

だめ。もうだめ。イツちやう♡♡

どんなに我慢しても、この、絶頂を迎える時だけは声が出てしまう。

「ああっ♡あんっ♡あっ♡」

「ん……そろそろか？いいぞ、イッて」

千茅はそう言ってくれるが、蒼葉自身はなかなか自分に許しを与えられない。

(だめなのに♡私は千茅様にお仕えする身で、千茅様を気持ちよくしな
いといけないのに♡気持ちいい♡だめ♡もうだめ♡♡きもちいのくる
っ♡♡)

ぐちゅっ♡ぐぼっ♡ごりゅ……っ♡

自分の中で快樂が堰を切ったように押し寄せてきて、蒼葉は体をのけ
ぞらせて絶頂した。

「ぐめ、な、さいいいっ♡♡」

何度か動いたのち、千茅も避妊具越しに欲を放った。

「はっ……く……っ！」

蒼葉の隣に、千茅が倒れ込む。

「はぁ……っ、はぁ……っ」

二人分の乱れた息の中、蒼葉が重たい体を起こした。

「おい。まだ辛いだろう。休め」

「い、いえ……っ、お邪魔、しちゃ、駄目ですし……っ」

息も絶え絶えに言いながら、蒼葉は脱ぎ散らかされた衣服の中から自分の物を拾い集める。

それが終わると、おぼつかない足取りで千茅の部屋から出て、自室へ

戻って行った。

その背中を見ながら千茅は、蒼葉が「ごめんなさい」と言いながら達する様子を反芻していた。そして、「いつか絶対好きと言わせてやる……」と決意を固めていた。